



JUDGEMENT

scene-2

鳴海はるか

先日の件以来、菜奈はベルフェたちの住まう洋館に顔を出すことが多くなっていた。

今日も当たり前のようにベルフェたちの洋館に顔を出していた。

「ベルフェ、フルーレ、いるんでしょ？」

いつものように応接室へと足を運ぶ。

部屋の扉を開けて中へ入ると、そこにはいつものようにソファに足を放り出して寝そべるフルーレの姿しかなかった。

「あれ、今日はベルフェはいないんだ？」

「・・・チッ、俺のことは眼中にないってかぁ？」

フルーレは菜奈の方を向いてそれだけを言うと、ぷいっとまたそっぽを向いてしまう。

「ごめん。別にフルーレの事を無視しようとしたわけじゃないから。」

「まあそれはいいんだけどさ。お前毎日毎日ここに来なくてもいいだろ？そのために使い魔もやったんだし。」

使い魔というのはこの間の鴉のことだ。

使い魔は主の武器を出し入れできる器としての機能だけではなく、それを仲介として認められた相手との意思疎通を図ることができるのだ。

そのため、わざわざこの館まで来なくても菜奈とベルフェやフルーレは会話をする事ができるということをフルーレは言いたかったのだ。

「そうかもしれないけどさー。この前はたまたまうまくやれただよ。それにほら、私普通の女の子だし。」

「はっ。どこにあんなに綺麗に天使をぶった切れる普通の女の子がいるっていうんだよ。お前は絶対普通の女の子じゃあねえのはまちがいない。それとお目当てのベルフェはいないんだし、さっさと帰れよ。」

フルーレの言葉に菜奈はぷーっと頬を膨らませて反論する。

「なによ、紳士のベルフェと違ってやっぱり誰かさんはお子様ね。女性が来てもお茶のひとつも出せないのかしら？」

「そんなに茶が飲みたかったら勝手に飲めばいいだろ？御代はタダだから好きなだけな。」

「じゃあお言葉に甘えさせてもらって自分で入れてくるからいいわ。キッチンはどこ？」

「部屋を出て右。突き当りを左。右手に3番目の部屋がキッチンになってる。プレートも付いてるから間違えることはないだろ。」

フルーレの説明を聞いて菜奈は部屋に出た。

実は菜奈はまだこの館に出入りするようになってから、応接室以外の部屋へ入ったことがなかった。少し浮かれながら館の廊下を歩いていく。

「うわぁ・・・。」

目的のキッチンの扉をあけた菜奈の口は思わず開きっぱなしになってしまった。

キッチンなのに30畳くらいの広さがあったためだ。そこには大きな冷蔵庫に立派なワイン棚や諸々のアルコール類、そして目的の紅茶などがすごく丁寧に整頓されて置いてある。もちろん食器類も整頓され、ぴかぴかに磨かれて置かれていた。

どこを見てもすべてが凄く高価なものに違いないと菜奈は思った。そして菜奈は最悪割ってしまっても一番安いんじゃないかと思ったカップに適当な紅茶を淹れて、ワゴンで慎重に応接室まで運んでいった。

「あれ、こっちまで持ってきたのか？向こうで飲んじゃえば良かったのに面倒なことするなー。」

そんなフルーレの前に菜奈は紅茶の入ったカップをそっと置いた。

「別に頼んじゃいなかったのに。」

「でも私は一人より誰かと飲みたいから。ね。」

「お、おう。そういうことならいただく。ありがと。」

ちょっと照れながら紅茶を飲むフルーレを見て、菜奈の顔に笑みがこぼれる。

「それにしてもこのカップ……。」

「？そのカップがどうかしたの？」

「17世紀のフランス製かなんかの高いヤツだった気が……。」

「キャー——！？」

そのあとカップはベルフェが帰ってくるまでこの部屋を出ることはなかった……。

「ふうっ……それはさておき。ベルフェは何でいないの？」

「この間のことでなんか気になることがあったらしくて、ちょっと魔界の方で調べてくるってさ。」

「へー。こっちと魔界って簡単に行き来できるの？」

「そんな簡単に行き来できるもんじゃないさ。人間界でいうパスポートって言うやつ？あんな感じで結構面倒な手続きが要るんだぜ？ってお前、実は行きたいなーとか思ってただろ。」

「人の考え読むんじゃないわよ。だってさ、二人が来たところってどんなとこなのか興味あるもん。」

「たぶんお前の考えてるのって暗くて怖そうなイメージだと思うけど、割と人間界に近い感じだよ。神界も同じようなものらしいしぜ？俺は行ったことないけど。」

「へー、それはかなり意外かも。」

「まあそれがそう意外なことじゃないんだな。」

フルーレはソファから起き上がると窓際まで歩いていき、伸びをしながら言った。

「もともと人間界を作ったのは神と、俺たち悪魔だからな。」

「え？どういうことなの？」

「人間界では人類を創造したのは神ってことになってるだろ？」

「うん。私は宗教には関心ないからよくは知らないけど、よくそんな感じのことは聞いたりするね。」

「どれはそもそも神が人間界に広めたことなんだよ。人間界を実際に作ったのは神と悪魔、正確に言えば神と悪魔に別れる前の俺たちさ。」

菜奈の頭の中でフルーレの言葉が反響する。人間界を作ったのは神と悪魔、神と悪魔は基は同

じもの？それが何かをきっかけに二つに分かれて・・・。

「まあ単純に言っちゃまうと神と悪魔は基は同じひとつの存在だった。それで人間界を作った。そのあとに諍いがあって神と悪魔に分かれた。神と悪魔の争いはその後も続いて今、人間界に影響力があるのが神ってことさ。」

そこでフルーレは一度話すのをやめてソファーに座ると、続きを続けた。

「人間界でもあるように、内乱が起きて神と悪魔という形で二つの集団ができた。それから幾度となく神と悪魔は戦っている。5千年とか1万年とかの期間ごとにね。ただ、そこでひとつ問題があるのさ。」

「問題？」

「神側が毎回この人間界を決戦場所を選んでくるってことさ。」

「確かに神界と魔界の間の人間界で戦争するのは理に適ってる。けどな、そのたびに地球に大きな変動が起きてるんだ。氷河期なんかは最も影響を受けたいい例だな。そこまでは行かなくても古代文明で原因不明で滅びたところなんかは神と悪魔の小競り合いが影響してるんだ。アトランティスとかムーとかの文明なんか跡形もなく海の底に沈んでる。」

ここまで静かに話を聴いていた菜奈が手を挙げる。

「はいはい質問ー！」

「なんだ？」

「結局ぶっちゃけ何が言いたいの？」

思わずフルーレが頭を抱える。今までの説明が菜奈にはまったく伝わっていなかったかと思うとドツと疲れが出てきた。

「・・・まあいいよ。まあとにかくベルフェはしばらく留守だけどここにくるのは自由だしゆっくりしていくといいさ。」

「お言葉に甘えさせてもらおうね。ところでフルーレってポテチ好き？」

「ぽてち？それは食べたことねーな。」

「それじゃ一緒に食べようよ。」

菜奈はコンビニ袋の中からポテチを取り出すと袋を開けて、フルーレのほうへ差し出した。

「へー、これがポテチっていうんだ？これってスナック菓子っていうやつだろ？ベルフェってさ、こういうのは体に悪いからって食わせてくれないんだよ。うんうん、こういうの俺好きだよ。」

フルーレは喜んでバクバクと食べる。菜奈も一緒になって食べていると、フルーレが菜奈の手を見て言った。

「お前の使い魔、姿が見えないと思ったら指輪になってたんだな。よく姿の変え方分かったな。」

「なんかいろいろ考えてたらできちゃった。こっちの方が刀を取り出すときにも便利かなって思ってた。」

「なるほどな。まあでも自分から離せるようにしとくのもメリットがあるんだぜ？動物にしておけば自分より先のものを見に行かせたりできるしな。」

「ふむふむ。その辺も踏まえて考える余地あり、ってことだね。ところで話は変わるんだけど、フルーレがポテチ食べるのが初めてで気に入ったって言うならさ、今からハンバーガーでも食べに行かない？たぶんフルーレは気に入ってくれそうなんだけど。」

「ハンバーガー？それは名前だけは知ってるかな？」

「パンのあいだにハンバーグと野菜とかチーズとか挟んだ食べ物だよ。きっとフルーレなら気に入ってくれると思う。」

「よし、その話乗った！早速ハンバーガー食べに行こう！」

「おー！」

二人で話しながら歩いていると、ほどなく繁華街にあるハンバーガーショップに着いた。

「フルーレは好き嫌いとかない？特に要望がなければ私頼んじょうけど？」

「好き嫌いはまったくないからお前に全部任せるよ。」

菜奈はスタンダードなセットを二つ頼んで空いた席に着いてフルーレと一緒に食べた。

「おお、こいつはかなり俺好みだ！」

「よかったあ、喜んでくれて。結構フルーレと私の好みは似てるのかもね。あ、そうだ！また今度違うものも食べに行かない？」

「おお、いいな！それにしてもベルフェは何でこういった食べ物には興味ないのかねえ。」

「ベルフェはなんだか高級西洋料理とかしか食べなさそうな雰囲気あるもんね。って今更なんだけど、フルーレって普通の人間の目には見えないんだよね？」

「ああ、そうだけど今は普通の人間にも見えるようにしてる。そうしないと街についてからの菜奈の行動がかなり不審になっちゃうだろ？」

「は一、良かった。それを心配したんだ一。」

菜奈はほっと胸を撫で下ろした。もし今まで自分が一人芝居をやっていたらしゃれにならない・・・。

「菜奈一！」

後ろから急に声を掛けられ、菜奈は思わずビクツとなる。振り返ると菜奈の親友の昴愛だった。

「菜奈、その人誰よ？彼氏？外人さんみたいだけど・・・ってあれ？いない？」

愛がキョロキョロしている。フルーレは変わらずすぐ横に立っているけど・・・姿を消したみたいだ。

『お前の想像通り姿を消してる。ところで天使が姿を現したな。何体か分からないけど複数いるな。俺は今からそっちへ行く。お前は帰れ。』

『私も行く。この間の戦いで大体コツはつかんだから、足手まといにはならないつもりよ？もし危なそうだったら逃げるし。』

『まあそう言うだろうと思ってたよ。とにかく自分の安全最優先だ。無理はするなよ。』

フルーレはそれだけ言うと駆け出した。

「愛、ごめん！ちょっと急用思い出したから先行くね。また学校で！」

菜奈もフルーレを追って駆け出す。向かう方向から推測すると、どうも路地裏らしい。

先を行くフルーレが銃を取り出すのを見て、菜奈も刀を出し攻撃に備える。

やがて路地の突き当りが見えてくる。天使の姿とともに一一。

フルーレが遠距離から先制の一撃を放つ。だが、こちらの存在はすでに察知していて難なく銃撃はかわされてしまう。

「ちっ！雑魚のくせにかわしてんじゃねーよ！」

フルーレが毒づく。しかしそこは手馴れたもので、動きを読んで天使が避けた先に二発、三発と打ち込んでいた。

初弾こそ外したものの、追撃の弾丸は見事に天使を捕らえ粉碎していた。

残りの天使は、と確認しただけで十体はいる。

「分担してやろうぜ。高い位置にいる奴は俺がやる。それで今回は終わりだ！」
フルーレと菜奈は天使との距離を詰める。

菜奈が天使の懐に入る前に、天使のほうはいつの間にか取り出していた弓で矢を放ってきた。
「なによコイツ、愛のキューピッドでも気取ってるわけ？」

放たれた矢を刀でうまく払うとそこから斬り付けに入ろうとする。そこで視界の隅に天使が入るのが見えた。

あぶないっ！菜奈はとっさにスライディングして姿勢を低くする。すんでのところできさきまで菜奈がいた場所を矢が通過する。

菜奈はスライディングをうまく利用してその目の前の天使の下を上手くくぐった。そのまま天使の背後を取る。

次の瞬間には鞘から抜かれた刃が天使を両断していた。

そしてそのまま隣にいた天使も斬り捨てる。

視界の隅ではフルーレが倒した天使が落下しているのが見える。向こうも順調に天使を倒しているみたいだ。

そんなことを考えているあいだにも後ろに気配を感じた。

横に避けながら横薙ぎに刀を払う。

後ろにいた天使は胴体を真っ二つにされて崩れ落ちる。

そして後ろにいた天使が放った矢は、向かい側にいた天使に直撃した。だが、致命傷ではない

。そこまで走りこんでその天使を倒すと、その死体をそのまま蹴り倒す。

すぐ後ろにいた天使に死体がぶつかり、ぶつけられた天使がよろめいた。

そこを上手く一闪する。そのあいだにも菜奈は次の獲物を捜す。

そこへフルーレを弓で狙おうとしている天使が目に入る。

「あんたの相手はこの私よっ！」

走りながら叫ぶと天使がこちらを振り向きざま射ようとしてくる。

菜奈はその腕を斬りおとすと天使を脳天から両断した。

「よしっ、ミッションコンプリートだっ！」

フルーレの銃声が響いて天使が地面に落ちる。

周りに動く天使はいなくなっていた。

「それにしてもお前やっぱりすげえ腕前だな。俺もベルフェも刃物使うけど、こんなに綺麗には斬れないぜ。実は悪魔なんじゃないか？それとも神だとか？」

フルーレがいたずらっぽく笑う。

「まあそれはないと思うけど、剣術については物心つく前から教えられてたからね。家が宗家だから。それにしてもこの刀凄い切れ味よね。それだからじゃない？」

菜奈がまじまじと刀身を見る。血糊もまったく付いていないし欠けもまったくない。

この刀なら瓦割りならぬ瓦斬りができそうな気がする。

と、ここで菜奈は足元に転がる天使の死体のが気になった。

「ねえフルーレ、この天使の死体ってどうなるの？」

「ほうっておけばそのうち消えるさ。水が蒸発するようなもんだね。どうせ人間の目には見えな

いし。」

「うん……。私の目には見えちゃうから気持ち悪いんだけど……。」

「気にしない気にしない。どうせこいつら作られたものだからな。意思もなくただ命令されたことを実行するだけだから。」

そこまで言ってからフルーレはハッとした。

「そういえばこいつらの目的ってなんだ……？」

「私たちをやっつけようとしてたんじゃないの？下手な鉄砲も数打つちゃ当たる、的な。」

菜奈は刀をしまいながら答えた。そして路地の外へと歩き出す。

フルーレは何か釈然としない気持ちのまま菜奈の後へ続いた。

何気なくフルーレは菜奈の少し先の地面を見た。

一瞬だが空間が歪んだように見えた。

「！？菜奈！後ろに跳べ！」

次の瞬間、菜奈の体に物凄い衝撃が加わっていた。とっさに身を守ろうと菜奈は腕を出していたが、そんなものはまったく意味のない行為だった。

ゴキッ！バキッ！ゴキッ！

骨の折れる嫌な音が響く。菜奈の骨は腕だけでなく、肋骨まで達していた。激しく吐血する。

そして物凄い勢いで吹き飛ばされていた。フルーレが後ろから菜奈の体を抱きかかえ、壁への激突を避ける。

フルーレは菜奈の状態を確認する。

とりあえずは命に別状はないが両腕と肋骨数本が折れて、折れた肋骨が肺に刺さってる。早く処置をしたほうがいい。

だが、先ほど歪んで見えた空間には今ははっきりとした姿があった。

天使ではなく、もっと人型のもの。

「……神のお出ましか。」

「アイネイアースと申します。貴方はフルーレリティとお見受けしますが？」

「ああそうだ。それにしてもさすが神、汚ねえな。やっとな姿を見せたと思ったら不意打ちかよ。」

「それは心外ですね。私の天使たちが貴方たちにひどい目に遭わされたから来ただけのことですのに。」

「はっ、お前がこいつらを使って俺たちを誘い込んだだけだろ。お前らにとってはどうせ天使なんか物にしか過ぎないんだろからな。」

「まあその点に関してはほぼ仰るとおりでしょうか。ただ本日は本来なら私は出てくるつもりはなかったのですけどね。」

「じゃあさっさとここから失せろ。邪魔だ。」

「そんなことは言わずに、せっかく邪魔者もいなくなったことですし少しくらいお付き合いください。」

そういうとアイネイアースはフルーレ目掛けて突っ込んでくる。その手にはメイスが握られていた。

フルーレが二丁拳銃を連射する。だがその弾丸はギリギリのところまで全てかわされていた。

フルーレの体がアイネイアースの射程圏内に入る。

「チェックメイトです！」

だが、そこでフルーレがニヤリと笑う。

「わざわざ射程内に入ってきてくれてご苦労さん。」

フルーレの手にはすでに銃はなく、両手にナイフが握られていた。

「なにっ？くっ、カオスインパクト！」

アイネイアースがメイスを振り下ろしてくる。だが、フルーレはさらにその懐に飛び込んでいった。

「くらえっ！舞踏乱舞！」

アイネイアースの攻撃はむなしく空を斬り、代わりにフルーレのダガーによる連続攻撃がアイネイアースの体にヒットした。

アイネイアースの体が激しく吹き飛ばされ、辺りに土煙が舞う。

「くっ、何だあのスピードは・・・。」

アイネイアースが傷ついた体を起こすともうすでにフルーレの姿も菜奈の姿もなかった。

「ちっ、逃げられましたか。ぐっ、今度会ったときは必ず潰しますよ。」

アイネイアースはそう呟くと、現れたときと同じように唐突に姿を消した。

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

本作はショートストーリーで月に一度の連載型式で続けていこうと思っています。
現在病気療養のためのリハビリを兼ねての執筆ですので誤字脱字等あるかと思えます。
そういったことや、その他なんでもいいのでご指摘くださるととても嬉しいです。
それでは、次回作でまたお会いできることを祈ってー。

2013年5月1日

JUDGEMENT scene-2

<http://p.booklog.jp/book/67707>

著者：鳴海はるか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fd3sharuka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67707>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67707>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ